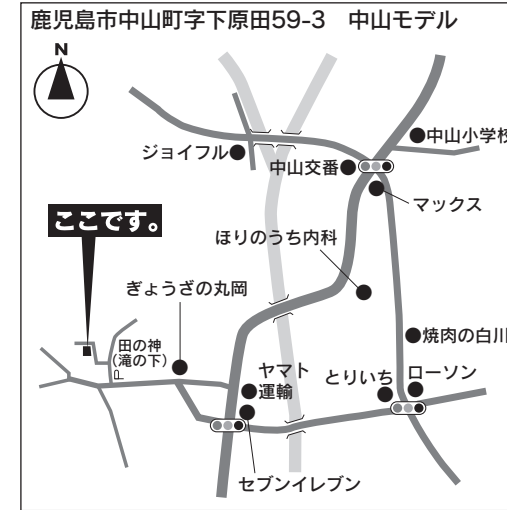


中山展示場 公開中!

総2階建の平均的な住宅に、木製デッキと玄関ホールをプラスした住まい。



地球環境保全のための高断熱対策で住宅経費を削減し、経済的な暮らしやすさも同時に追求しました。これから逼迫が予測されるエネルギー事情を見据えた高性能展示場です。暖房はエアコン1~2台だけという最もシンプルな設備構成とし、住宅性能の良さだけで、省エネルギーを目指した展示場です。



ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー 2013・スペックの展示場

川内展示場 公開中!



本展示場は【ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー 2013】大賞受賞のスペック通りに造った展示場です。エアコン一台程度で冬も夏も快適な暖冷房を可能とした省エネルギー、超高性能住宅です。鹿児島県に相応しい期間蒸暑地域対応型住宅として、全国的に評価された工法です。設備は少ないほど、更新に必要な資金は少なくなります。



□住宅に関する資料等もフリーダイヤルにてご請求下さい。資料等をお送り致します。

0120-079-089

ひこうき雲

地球温暖化対策が問題になっているなか、15年以内に「小氷河期」の予測。

イギリス・ウィルズで開催された国立天文学会議で「小氷河期」到来を発表。

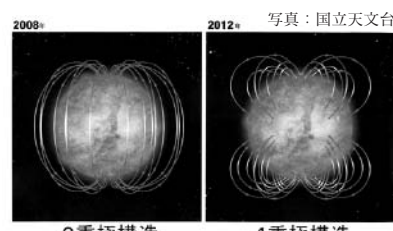
2050年までに「小氷河期」到来の予測を公表?

今月の初めNHKニュースがイギリス国立天文学会議で2050年までに「小氷河期」が到来すると警告。というニュースを伝えました。画面は、3000年前にテムズ川が氷結した絵画を示して、怪訝そうにニュースを伝えるアナウンサーが映っていました。翌日の新聞にも三面の隅に小さな記事が掲載されました。その後は黙殺されてしまったようで、関連の記事は全く見当たらずにしまいました。以前にも「ひこうき雲」では、ロシアの地球物理学者の話として、寒冷化を話題にしました。で、今回もう少し調べてみました。研究リーダーのノーザンブリア大学(ヴァレンティナ・ジャルコヴァ教授(数学))によると、現在の太陽活動についての予測を、実際のデータと比較すると、マウンダー極小期と「小氷期(ミニ氷河期)」が、

現在の太陽黒点活動と類似

マウンダー極小期とは、太陽活動のパロメーターである太陽黒点数が通常であれば4万~5万個程度が観測によって数えられる期間に、マウンダー極小期の30年間で観測された黒点数は約50を数えるだけで、当時の太陽天文学の研究者で黒点現象の消失について、過去の記録を研究したエドワード・マウンダーの名前に因んでいます。

97%の確率で、あと15年ほどで再び訪れる可能性があるということが、英国ウィルズのランドイドノで開催された「全英天文学会議2015」で発表された。と言ったことが判りました。



太陽の磁気構造が変化しています。これまでは太陽の南極(N極)から出た磁力線が北極(S極)に入る2重極の構造。これが南北ともN極で赤道付近がS極となる4重極構造に変わりつつあるようです。

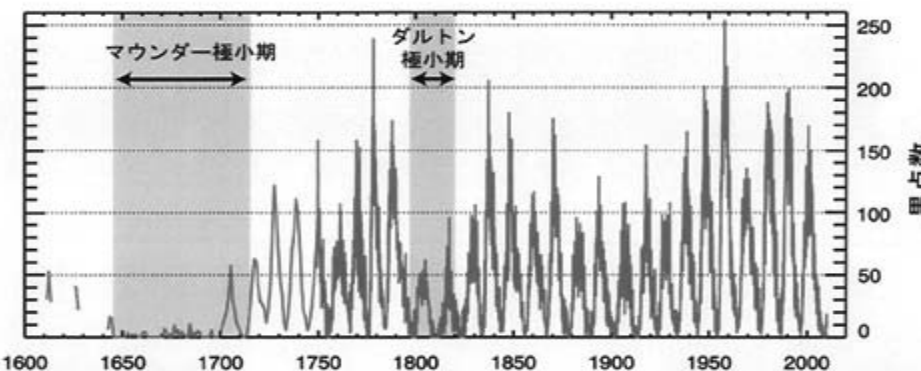
要約すると「最近の研究によると、マウンダー極小期と呼ばれる17世紀を中心とした近世の寒冷期にも起きていたらしい太陽活動の低下は、マウンダー極小期と同じように、地球の気候を寒冷化させる可能性があり、太陽活動と気候変動をつなぐカギを握るのが、銀河宇宙線が「マウンダー極小期」のような寒冷な時期には、大量の宇宙線が地球に入り込み、宇宙線が増えると雲ができやすくなり、気温が下がるのではないかと、宇宙線説で想定されている宇宙線的作用としては、荷電粒子であ

太陽観測衛星SOHOの国立天文台の見解。

2006年9月に「ようこう」の後継機として打ち上げられた太陽観測衛星「ひので」を運用している国立天文台の常田教授によれば「太陽の磁場は地球と同じく、北極がS極、南極がN極という「二重極構造」になっていることが多いが、太陽の磁場が二重極や四重極、六重極、八重極、それ以上に変化していることは理論的に予測されていること、こうした極構造の変化が、これまでも太陽活動の変化となって現れている、という指摘も研究者によってなされていきます。黒点数は11年周期で増減を繰り返しますが、周期にはブレがあり、黒点数の増減

る宇宙線が生み出すイオンの効果によって雲の核が形成されやすくなることや、雲にたまる電荷が増えることなどで雲の成長が促進されるなどがある。これを実験室で確かめる試みも動き出している。」というものです。

■1600年~2010年の太陽黒点数。(国立天文台)



数も異なり、1645年から1715年にかけて長期間、黒点の数が非常に少なくなった時期を「マウンダー極小期」と言いますが、フランスのソコロフ、ニセムレベスの両博士は、マウンダー極小期には、1994年に太陽が四重極になり、太陽活動が停滞していた可能性があり、という論文を発表しています。やはり黒点数が少なくなった、ダルトン極小期(1790年~1830年)では、黒点数変動の周期が通常の11年よりも長く、13~14年になっていたこともわかっています。1996年に黒点数の減少が始まった周期も12~6年と長く、これは

寒冷化・温暖化をどう考えるべきか?

それでは、仮にマウンダー極小期並みに、太陽活動が低調な期間が長期間続いたとしたらどうなるのでしょうか?

北半球の平均気温はマウンダー極小期でマイナス0.6℃、ダルトン極小期でマイナス0.5℃低かったため、小氷河期と言っても20℃も30℃も低くなるわけではないのです。平均気温0.5℃低くなるだけで、飢饉や干ばつが発生するだけ地球環境はデリケートです。1940年以降、地球の平均気温は30年で約0.5℃上昇しており、これが温暖化として問題になっているのです。マウンダー極小期のような太陽活動の停滞期が訪れると、地球温暖化による気温の上昇分を相殺する可能性もありますが、温暖化と寒冷化が混在して、大きな天候異変を起こす可能性もあります。温暖化にも寒冷化にも対応可能な、ハイブリッドな本物の住宅性能が求められます。